

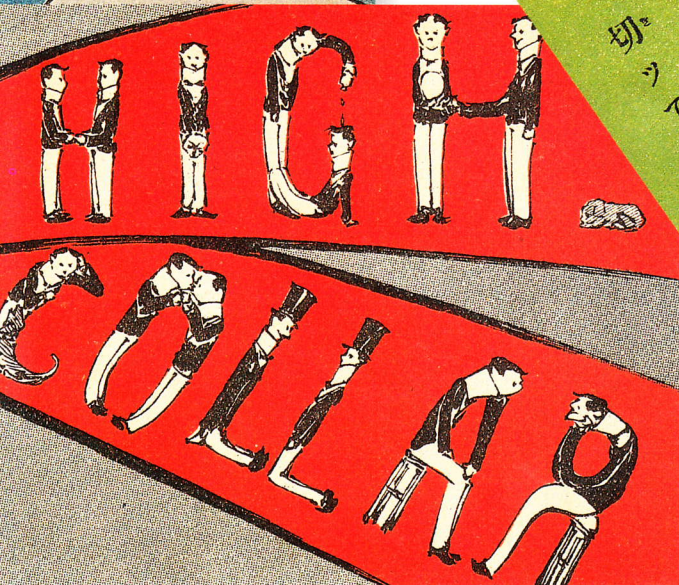
特別展

フィリップ・バロス コレクション

絵はがき芸術の愉しみ

— 忘れられていた小さな絵 —

鹿子木孟郎(部分)



作者不詳「HIGH-COLLAR」(部分)



竹久夢二「青き夜のものかたり」(部分)



1993年8月4日(水) — 9月12日(日)

開館時間: 午前9時～午後5時(入館は4時30分まで)

休館日: 8月8日(日)、9日(月)、16日(月)、23日(月)、30日(月)、9月6日(月)

入館料: 一般200円(160円)/小中学生100円(80円)※()内は20名以上の団体料金

主催=渋谷区立松濤美術館/朝日新聞社 後援=フランス大使館

渋谷区立松濤美術館
THE SHOTO MUSEUM OF ART

絵はがきは、いまではもっともありふれた印刷物として、とくに意識することさえも少なくなりました。そうした、今日的状況の端緒となったのが、明治末から昭和初期にかけて、ヨーロッパ各地ばかりでなくわが国でもおこった絵はがきの大流行です。

ブームの加熱は相当なもので、絵はがきの専門誌が発行され、専門店が生まれ、人々は新作を買い求めようと早朝から列をなしました。発売元はより新奇なものの人気のあるものをもとめて工夫をこらし、多彩な絵はがきが作られました。

現在より情報の伝達手段に乏しかったこの時代、安価で大量に出回る絵はがきにはたんに通信手段である以上の意味を担わされていました。観光地・旅行の記念品としてばかりでなく、プロマイド様のもの、名画の複製、風刺や漫画といった見て楽しむもの、デザイン性・芸術性を追求したもの、広告宣伝用、事件・出来事の記録、はてはかなりグロテスクなものまでありとあらゆるものが登場します。こうした絵はがきの流行は、写真や印刷というメディアをとおして、複製文化の浸透、情報社会の発展、美術の広汎な大衆化を促していった時流とも軌を一にします。

本展はフランス人収集家フィリップ・パロス氏の3000点を越えるコレクションの中から約650点を厳選し展覧するものです。これらの絵はがきは絵画的にすぐれたものに主眼をおいて選ばれており、日本画家では橋本雅邦、簗木清方、梶田半古、平福百穂など、洋画家では浅井忠、中村不折、岡田三郎助、和田英作など、版画家では太田三郎、橋口五葉、前川千帆など、また風刺・挿し絵画家の竹久夢二、落谷虹児、中沢弘光、高島華宵、一条成美、杉浦非水、墨池亭黒坊など、様々な分野の有名無名の作家がたずさわり、自由な発想で豊かな表現をしています。浮世絵調、アール・ヌーボー調のものから漫画・スケッチ風、デザイン的なものまで、十数センチほどの方形の小さな絵のなかに、作家たちの意外な一面を再発見するとともに、そこにこめられた当時の思いをうかがう機会となることでしょう。



簗木清方



太田三郎「Sweetest Sorrow」



落谷虹児「花に泣く」



アンロ・イエーネ「カルピス」広告絵はがき

■講演会 8月7日(土) 午後2時より
講師：富田 章 (そごう美術館主任学芸員)
「絵はがき芸術の展開とその意味」

- 美術映画会(午後2時より)
8月21日(土)「世界・美の旅 ルノワール、セザンヌ」
9月4日(土)「世界・美の旅 マネ、モネ」
- 美術相談(午後2時～4時)
8月14日(土) 講師：遠藤原三(洋画)、佐藤善勇(洋画)
9月12日(日) 講師：佐久間公憲(洋画)、戸田康一(日本画)

